

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2021

課題番号：16K04379

研究課題名（和文）学童保育児童への心理的支援の検討：心理アセスメントの活用を中心に

研究課題名（英文）A proposal for psychological support for children on the After-school Childcare: Application of an assessment battery

研究代表者

佐々木 裕子（SASAKI, Hiroko）

聖徳大学・心理・福祉学部・教授

研究者番号：40284450

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、放課後児童クラブ（学童保育）において、心理アセスメントを活かした児童の心理的支援の拡充を図ることであった。研究1では、放課後児童支援員と心理職が児童理解と支援方針を共有できる「児童支援マトリックス」を開発した。これは、「児童理解サマリー」、「児童理解チェックシート」、「児童支援チャート」の3つの様式から構成されている。研究2では、児童支援に役立つ心理アセスメント方略として、「ハンドテスト」、「風景構成法」と「円環家族関係イメージ図」によるテストバッテリーを開発した。これらのアセスメントバッテリーによって、児童の心理的特徴を相補的に統合して理解できることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

児童への心理的支援として、日常生活場面である放課後の時間に何らかの形でその児に合った心理的支援を提供することができれば、心理臨床現場に持ち込まれるような深刻な問題を抱える前に、子どもたちは何らかの方法で対処力を獲得し、自らの力で成長していけるかもしれない。本研究は、そうした日常生活場面である放課後児童クラブの中で、心理支援環境を形成する方略を提案した。心理アセスメントは、心理臨床の専門家のみで共有されがちであるが、本研究で開発した「児童支援マトリックス」を用いることで、心理職と放課後児童支援員が児童の心理的特徴を共有・連携しやすくなり、放課後児童クラブでの心理的支援の拡充が期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to expand the psychological support for children by utilizing psychological assessment on the After-school Childcare. In Study 1, we developed the summary sheets, named "Matrix of psychological support" that made by after-school child support staff and psychologists to share understanding and psychological care plans for children. It consists of three formats: "Child Understanding Summary", "Child Understanding Check Sheet", and "Psychological Support Chart". In Study 2, as a psychological assessment strategy for supporting children, we developed a test battery using "the Hand Test", "the Landscape Montage Technique" and "Family Image with Colored Circles". This assessment strategy can lead to make an integrated understandings of psychological characteristics of children.

研究分野：心理アセスメント

キーワード：心理アセスメント ハンドテスト 家族関係イメージ図 風景構成法 学童保育（放課後児童クラブ）

## 1. 研究開始当初の背景

学童保育事業は、平成 19(2007)年及び 24(2012)年に行われた「放課後児童クラブガイドライン」の改定により、その役割は当初の単に昼間保護者がいない家庭の児童を預かるというだけのものから、①地域における子育て環境の充実、②子どもの放課後の居場所づくり、③家庭での子育て支援(虐待の早期発見と予防など)、④発達に遅れのある児童への支援など、より多様なニーズに応える事業へと大きく変容した。同時に、学童保育のスタッフに対しても、放課後児童支援員としての資格認定が開始され、障害のある子どもや虐待を受けている子ども、さらにはその保護者への対応が求められるなど、より専門的で高度な心理的支援能力が求められる仕事になっている。

にもかかわらず、多くの学童保育施設では、急激な入所児童の増加による多様な問題(家庭・家族の問題や発達の問題)を抱える児童への支援に手一杯で、より専門的なケアを提供できる人材の育成や支援体制を整備するのが難しい状態にある(伊部, 2010)。そのため、必要性が指摘されながらも、児童支援員による児童への心理的支援に関しては、研究としても、また実践としてもまだ十分には行われていない(赤津・金谷, 2009, 2011)。

そのため、一般児童生徒の多様なニーズを心理アセスメントによる客観的データから捉え、それを心理的支援につなげていく方略が開発されることは、今まさに児童支援の現場が求めていることである。心理の専門家だけでなく、保育や児童支援のスタッフにとっても分かりやすく、具体的な支援方針を提供できる心理アセスメント方略が整うことは、個別児童への心理支援が急務とされる学童保育現場において、恒次(2014)が指摘する個別の児童に関するカンファレンス体制を整えることにもつながる、非常に重要な課題である。さらに、現代の児童が抱える様々な家族・対人関係、心理的発達の課題に関しても重要な知見を得ることにつながると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「放課後児童クラブ(学童保育)」において、心理アセスメントを活かした児童の心理的支援の拡充を図ることである。これまで心理アセスメントは、心理臨床の専門家のみが理解できる専門用語によって提示され、臨床現場においてのみ活用されてきた経緯がある。そこで本研究では、心理アセスメントを誰もが理解可能な様式に作り替え、その内容を保育や児童支援の場において活用できることを目標とした。研究 1 は放課後児童支援員と心理職(公認心理師・臨床心理士等)との連携による心理支援の在り方を提案することを目的とし、研究 2 は多様なニーズをもつ学童保育児童に対する心理的支援に役立てられる心理アセスメント方略を開発することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究 1「児童支援員と心理職による連携の在り方の提案」と、研究 2「児童支援に役立つ心理アセスメント方略の提案」の二部構成となっている。研究 1 と 2 は、それぞれが独立した研究ではなく、研究 2 は研究 1 を実践するために必要となる実証データの検討(基礎研究)となっている。

### (1) 研究 1 の方法

研究 1 では、児童支援員と心理職の連携の在り方を提案するために、心理職と児童支援員が連携して児童の支援を行っていけるようにするための「児童支援マトリックス」の開発を行った。さらに、学童保育児童を対象に、「児童支援マトリックス」を用いたモデル事例による実践研究を行った。

### (2) 研究 2 の方法

研究 2 では、一般児童の心理的支援に役立つ心理アセスメント方略の開発と、解釈仮説の検討を行った。まず、学童保育児童を対象とした個別調査により、「ハンドテスト」(Wagner (1961, 1986)), 「円環母子関係イメージ画」(小川・松尾, 1999), 「風景構成法」(中井, 1970) のアセスメント方略の検討を行った。さらに、学童保育児童を対象とした集団調査により、「円環家族関係イメージ画」および「風景構成法」の検討を行うとともに、新しく開発した「円環家族関係イメージ図スティック法」に関しては、大学生集団を対象に解釈仮説の検討研究を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 研究 1 の成果

研究 1 の成果は、放課後児童支援員と心理職が児童理解と支援方針を共有することが可能な「児童支援マトリックス」と名付けた様式を開発したことである。これは、児童支援員と心理職が連携して作成する「児童理解サマリー」、「児童理解チェックシート」(図 1), 「児童支援チャ

ート」(図2)の3つの様式から構成されている。この3つの様式を用いることで、児童の心理的特徴を理解しようとする視点が形成でき、その児童にあった支援方針と具体的な支援内容をその児童に関わる大人(放課後児童支援員をはじめ、保護者や教員も含めて)が共有し合うことを可能にするものである。研究1では、この児童支援マトリックスを用いた児童理解と、心理職と児童支援員が連携して行った保護者への支援のモデル実践事例を提示した。

記入日: 年 月 日  
記入者名: \_\_\_\_\_

児童理解チェックシート

児童氏名	性別	年齢	学年	在籍年数
該当する項目には○, 明らかに該当しない項目には×をつけてください。				
<b>■クラブに居るときの表情や様子</b>		<b>■支援員に対する態度/保護者への態度</b>		
たいてい笑顔も多く元気である		自分から挨拶するなど積極的に関わってくる		
元気のよい時と大人しい時と差がある		ベタベタと甘えたように接触を求めてくる		
いつも落ち着かず動いている		声を掛けてもきちんとした返事を返さない		
表情に乏しくどうしたいのかわからない		顔を覆いながら遠慮がちに話しかけてくる		
シャツが出たまま身だしなみに無頓着		保護者が居る時の方が元気になる		
たいてい静か自分からは接してこない		保護者が居るといつもよりきちんとしている		
(エピソードや気づいたことなど)		(エピソードや気づいたことなど)		
<b>■友達との遊び方</b>		<b>■友達とのトラブル時の様子</b>		
複数の友達と協同して遊んでいる		トラブルがあったら自分で訴えてくる		
自分が仕切りたいが周りはついてこない		自分から手を出して喧嘩になる		
同級生よりは下級生と遊んでいる		仲裁されてもなかなか喧嘩を辞められない		
自分から友達を遊びに誘えない		喧嘩の後しばらく機嫌が直らない		
少数者のおもちゃを使った遊びが多い		自分の思う通りにならないとすぐに怒り出す		
走り回るなどを動かす遊びが多い		何かあっても保護者からの訴えで判断する		
一人で遊んでいることが多い		本人は分からないまま周りを怒らせている		
(エピソードや気づいたことなど)		周りからやられたっけにならなっている		
		(エピソードや気づいたことなど)		
<b>■社会的活動時の様子</b>		<b>■遊びや活動時の様子</b>		
状況を理解してすべきことがわかっていない		難しい遊びや課題にも根気よく取り組める		
やるべきことの切り替えに時間がかかる		鉄や箸など手先を使った作業が苦手		
何をしようか決まれない		忘れ物や無くなるものが多い		
順番を待たずトラブルになることがある		次々と遊びが変わり、気が散りやすい		
ゲーム等のルールが十分理解できていない		体を動かすことが億劫で動きが鈍い		
食べ方等基本的生活習慣が身につけていない		縄跳びやスキップなどは動きがちがく		
(エピソードや気づいたことなど)		(エピソードや気づいたことなど)		

図1 児童理解チェックシート

記入日: 年 月 日  
記入者名: \_\_\_\_\_

児童支援チャート

対象児童番号	性別	年齢	学年	在籍年数
<b>■この子への基本的な関わり支援</b>				
<目標>				
<b>関わる際の基本的姿勢</b>		<b>保護者への支援</b>		
本人の主観的な活動を見守り、積極的に取り組むよう本人を認めていく。		保護者から家庭での様子を聞くなど、子育ての協同者としてクラブを認識してもらう。		
他の子に関心を与えるような声掛け、集団遊びへの導入など対人交流を仲介する。		保護者から承認されることが重要な児童のため、保護者の前では積極的に褒める。		
何をやる時間かを具体的に指示し、注意が逸れる刺激を少なくするように配慮する。		保護者が積極的に関わられるよう、子どもの思いや考えを代弁し、保護者に報告する。		
普段から穏やかな声掛けをし、褒めること、本人の気持ちを代弁することを心掛ける。		保護者による関心を高める必要があるため、子どもの様子を積極的に保護者に報告する。		
目を合わせた挨拶、ハイタッチなど、基本的な対人接触の機会を増やす。		保護者が養育の難しさを抱えているため、子育ての苦労を労い、心配事など相談にのる。		
<b>■友人関係における支援</b>				
<目標>				
<b>友人との遊び場面の支援</b>		<b>友人とのトラブル時の支援</b>		
<b>主体性と協調性の支援</b>		<b>怒りのコントロール支援</b>		
何をしたいのか自分から伝えるように丁寧に聴き、友達に伝えるよう仲介する。		イライラの裏の傷つきを受け止め、普段から穏やかな口調で問いかけようとする。		
順番を譲ったり、周りと協力して遊んでいる時に積極的に褒めるようにする。		我慢できないときは先に報告してもらうなど、具体策を個別に作る。		
<b>他者への関心や情緒交流の支援</b>		<b>怒りを鎮めにくいため、場所を移動するなど状況を変えて落ち着かせる。</b>		
他の子の遊びに興味関心を持って、積極的に声掛けをする。		<b>トラブルに対する対処支援</b>		
一人遊びから他の子どもとの集団遊びに移行できるように仲介していく。		本人の理由を聞き、本人の思いを代弁した後、相手の気持ちを伝えるようにする。 Helpサインなど助けを求める具体策を個別に作る。		
<b>■心理的発達への支援</b>				
<目標>				
<b>社会的ルールの学習支援</b>		<b>認知協応機能の発達支援</b>		
<b>他者と自己の気持ち理解の支援</b>		<b>認知協応機能・集中力の発達支援</b>		
にらめっこなど、自分と相手の表情を使った遊びに積極的に誘う。		粘土や折紙、工作など手指を使う遊びや、鉄などの道具を使う遊びの機会を増やす。		
楽しい、困っているなど、その場に相応しい気持ちの言葉を積極的に伝える。		時間で活動を切り、おもちゃを制限して情報量を減らすなど、本人に合わせる。		
<b>社会的ルール理解の支援</b>		<b>体を動かす運動機能の発達支援</b>		
遊びのルールを本人に考えさせたり、単純に改編するなどルールを楽しませる。		スキップや片足とび、ボール遊び等、日常遊びの中に苦手なものを取り入れる。		
順番を守ったり、人に何か譲ったりできる		荷物を運ぶ、片付けるなど体を動かす手伝いを積極的に頼んで動く機会を作る。		

図2 児童支援チャート

## (2) 研究2の成果

研究2では、研究1で提案する児童理解サマリーを作成するための児童理解方略の基礎研究を行った。心理的支援のためのアセスメント方略として、児童の対人関係の特徴をダイレクトに解釈可能な「ハンドテスト」と、母子関係を中心とした家族との関係を象徴的に捉えることが可能な「円環家族関係イメージ図」、そして、認知・運動協応機能も含めた心理的発達特徴を解釈することが可能な「風景構成法」の組み合わせが提案された。

成果としては、まず「ハンドテスト」に関しては、「風景構成法」と「円環母子関係イメージ図」による組み合わせによって、児童の心理的特徴を相補的に統合して理解できることが示された。また、「円環母子関係イメージ図」による象徴的な方法によって児童の家族関係を捉えることで、児童理解を深めることが可能であった。また、児童の家族関係を捉える簡便な方法として、「円環家族関係イメージ図スティック法」を開発し、これによって児童が抵抗なく楽しみながら家族関係を表現することが可能であり、表現された家族イメージ図から、児童の家族関係を象徴的に理解できる可能性が示唆された(表1 家族関係イメージ図の分類基準)。そして、「風景構成法」に関しては、集団場面で実施する際には、一対一の臨床場面とは異なる実施法と解釈視点が必要となることを提案した。

## (3) まとめ

本研究は、心理臨床において行われている心理アセスメントを一般児童への心理的支援にどのように活用していくことができるかを提案したものである。心理臨床の専門家のみで共有されがちな心理アセスメントを「児童支援マトリックス」として、一般児童の心理的特徴の理解と支援方針を分かりやすく提示したフォーマットにすることで、心理職と放課後児童支援員が共有・連携していく方策を提示することができた。

しかしながら、本研究は個別での児童理解を研究方法として採用したため、放課後児童クラブといった集団場面においては、やはり限界もあった。今後、さらに放課後児童クラブにおける心理的支援を充実していくためには、集団場面を前提とした新たな心理アセスメント方略の検討、開発が求められるであろう。また、児童支援員と心理職が連携して児童理解と心理的支援にあた

るシステムを作っていくことも非常に重要であると考えられる。こうした取り組みによって、放課後児童クラブにおける心理的支援の質を高め、放課後児童クラブがもつ児童支援、子育て支援、家族支援といった多様な機能を意味あるものとしていくことが可能になると考えられる。

表1 円環家族関係イメージ図の分類基準

群名	全体的印象	マルの配置	用紙の使用方法	カテゴリー名	サンプル図	人数
分化	マル同士が外接している場合もあるが密集することなく、バランスよく配置されている (バランスよく独立している印象が主)	マルがほぼ等間隔でバランス良く配置	用紙全体をバランスよく使用	均等		5
			用紙のどこか(上下左右)を偏って使用	片均等		1
		マルが幾分不均衡に配置 (離散と異なる)	使用方法は問わない	偏向		6
整列	マルが重なり合っている場合もあるが、ほぼ並んで配置されている (分化や分離よりも整列している印象が主)	マルが横に並んで配置(複数列もある)	用紙全体をバランスよく使用	直線		7
			用紙のどこか(上下左右)を偏って使用	片直線		0
		マルがほぼ斜めに並んで配置	使用方法は問わない	斜め		1
密集	複数のマルが重なり合っていて配置されている (並んでいるよりも窮屈な印象が主)	ほとんどのマルが重なって配置	用紙全体をバランスよく使用	集密		6
			用紙のどこか(上下左右)を偏って使用	片密集		5
		群に分かれてマルが重なって配置	使用方法は問わない	群密		5
分離	マルがバラバラに分かれて配置されている (分化よりも分離している印象が主)	ほとんどのマルがバラバラに配置	用紙全体を使用	離散		5
			用紙のどこか(上下左右)を偏って使用	片分離		0
		バラバラだが、一部群(密集はない)になって配置	使用方法は問わない	群化		6
混合	密集と分離の特徴が共存して配置されている (密集・分離のどちらにも分類しがたい印象が主)	密集から一つのマルが孤立して配置	使用方法は問わない	孤立		6
		内包されたマルがある	使用方法は問わない	内包		4

引用文献

赤津純子・金谷有子(2009). 学童保育における子どもの生活の発達の研究. 埼玉学園大学紀要人間学部篇, 9, 275-281.

赤津純子・金谷有子(2011). 学童保育における子どもの生活—発達心理学的観点からの探求—. 埼玉学園大学紀要人間学部篇, 11, 113-122.

伊部恭子(2010). 学童保育における子育て・家族支援の課題. 佛教大学社会福祉学部論集, 6, 1-18.

中井久夫(1970). 精神分裂病者の精神療法における描画の使用, 芸術療法, 2, 77-90.

小川俊樹・松尾和美(1999). 現代の中学生のもつ母子関係イメージの検討—円環母子関係イメージ画法を用いて. 研究助成論文集(明治安田こころの健康財団編), 35, 80-89.

恒次欽也(2014). 障害のある子どもの学童保育(放課後児童クラブ)—今後の調査研究のための序—. 障害者教育・福祉学研究, 10, 27-32.

Wagner, E. E. (1961). The use of drawing hands as a projective medium for differentiating normals and schizophrenics. *Journal of Clinical Psychology*, 3, 279-280.

Wagner 著・山上榮子・吉川眞理・佐々木裕子訳(2000). ハンドテスト・マニュアル. 誠信書房 [Wagner, E. E. (1983). *The Hand Test manual* (rev. ed.) Los Angeles: Western Psychological Services. ]

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐々木裕子・吉田佳代子	4. 巻 第15号
2. 論文標題 「家族関係イメージ図形」法による家族関係振り返りセッションの提案：母親面接事例からの検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 聖徳大学心理教育相談所紀要	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 佐々木裕子・小川俊樹
2. 発表標題 円環家族関係イメージ図の家族機能測定尺度による検討
3. 学会等名 心理臨床学会第40回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木 裕子・小川 俊樹
2. 発表標題 集団実施法における風景構成法の『梓づけ』の意味 - 児童集団における検討 -
3. 学会等名 日本心理臨床学会第37回秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sasaki, H., & Ogawa, T.
2. 発表標題 Hand Test results predict insecure Mother-Child Relationship of Japanese children
3. 学会等名 XXIInd Congress of the International Society of Rorschach and Projective Methods, Paris, France. (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐々木裕子・小川俊樹
2. 発表標題 円環家族関係イメージ画の分類基準の検討 - 描画法とスティック法の比較から -
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36回秋季大会, パシフィコ横浜
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sasaki, H.
2. 発表標題 Integrated interpretation of the Hand Test and the Landscape Montage Technique.
3. 学会等名 The 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 吉田 佳代子・佐々木 裕子
2. 発表標題 ハンドテストと風景構成法による傷つき体験のアセスメント
3. 学会等名 日本心理臨床学会第35回秋季大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 佐々木 裕子
2. 発表標題 ハンドテストにおける図版との関係性概念の検討4 巻き込まれ反応Involved Responseの提案
3. 学会等名 日本ロールシャッハ学会第20回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	小川 俊樹  (OGAWA Toshiaki)  (60091857)	放送大学・教養学部・客員教授   (32508)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------